更に次の日。
昨晩ぐっすり寝たせいか仕事も順調で――
今日もあっという間にお楽しみの時間がやってきた。

――ピンポーン

さて今夜はどんなお嬢様が……
って、またあのサキュバスか。

――ピンポーン

今日こそはお嬢様で抜くと固く誓った俺は、
居留守を決め込むことにする。
と、2度目のチャイムが部屋に響く。
そこでふと大事なことを思い出した。

（待てよ。エロゲが届いたのかも？
時間指定は夜にしてたはずだし……）

――ピンポーン

ああああ……
もう我慢できぃいん！！

俺はついに
判子を握り締めて玄関扉を開け……

師匠おお、
開けるのおそーい！

……

大いに落胆し、
ユーナの額に
判子を押した。

うわ！？
な、なに？
何したの今？

うっさい。とにかく帰れってば。
判子貰ったら帰るのが、
人間界のルールなんだよ

む……なんだよこんなの。ほーら、これでなくなったもんね♪
ごしごし拭って得意げに言うと、当たり前のように上がりこんでくるユーナ。俺は俺で、妙に慣れてしまいその後に続いた。
お前、いい加減にしろよ？頼むから俺の平穏な日常を返してくれ
ごめんね、師匠。昨日のコトはボクも反省したんだ。得意だからって、いきなり足コキはないよね？「マニアックなプレイは状況に気をつけろ」って、先生に言われたのすっかり忘れてたよ
だから今日は、もっとフツーのプレイで昨日のお返し♪
あいかわらずこいつは、人の話を聞いていない。言い終えるや否や、ユーナは俺のズボンに指を伸ばす。
いらねぇんだけどなぁ……つか、おいっ、ユーナ何して！？

んゅ？　何って……ちゅぱ、フェラチオだよ？ペロッ、れるぅ……んっ！
んっ、んぁぁあむっ、んちゅぅっ、ちゅる、ん……っ
身体が動かないのは、ユーナのもたらす快楽にハマりつつあるからなのか――少女の生の舌が這うという視覚刺激は、思いのほか強烈だった。
にゅふふぅ、やっぱ師匠も期待してたんじゃん……こんなに固くなっちゃって……あむぅっ♪
んっ、ぷ、はぁ♪そーいえば……師匠のおチンポ近くで見るの、初めてだね♪
（おおおっ、落ち着け俺っ これはユーナだ……お前の好みには程遠い奴なんだ！）
えへへぇ……大きくてかっこいいッスね～ボクの処女をもらってくれてアリガトっ……ちゅっ♪

そう言って、愛しそうに尿道口に口づけするユーナ。
下半身に感じる刺激以上にこの魅惑的な光景が
たまらない……！

はむぅ……んちゅ……
ちゅるぅぅぅっ、んっ！
んちゅぅぅぅぅ……っ

（うぅっ！
そ、そんなもんに……
そんなもんにいいぃぃ……）

れろ、れる……ぬちゅぅ……
ん……やっ、あ……ん……
れりゅちゅっぱぁぁっ、
んぅっ、んちゅぅ――っ

れろ、れるぅ……
ぺロ、ちゅぷっ♪
ぷはぁ……
ね、ね、師匠お
気持ちいぃぃ……？

あ、ああ、
そうだな……

今夜こそ追い出そうと思っていたのに。
快楽に負ける自分が憎い。
意識はもうとっくに下半身に集中していた。
少女のフェラチオがもたらす感覚を、
一分たりとも逃すまいと貪欲に……

今の返事は半分嘘だ。というのも、
下半身に意識を集中すれば集中するほど、
1つの事実が浮かびあがってきた。
ユーナの唇がもたらす刺激は、
視覚的な刺激ほど強くないということ。
つまり――

お前ひょっとして……
フェラは得意じゃないか？

うぐ……わかるんだね……
……さすがは師匠……っ！

ボク、フェラチオの成績は悪かったんだ。
先生は口が小さいせいだから気にするなって
言ってくれたけど……かぷっ……

むろん、俺にとってそれはマイナスではない。
少々ぎこちないフェラの方が愛嬌があって良いのだ。
だが、ユーナはちょっとバツが悪そう、眉をひそめた。
気にしてたんだろうか。

師匠、お願いっ……
えろっ、ぢゅぷ……ボクに……
気持のいいフェラチオを教えてぇ

別に、
お前のフェラの善し悪しなんて、
俺には関係ねぇしなぁ……

うぅ、師匠冷たぁい……
ちゅぱっ、んむっ……お願いだよ師匠ぉ……
ちゃんと言うとおりにするからさぁ……
お口痛くなっても我慢するから♪

勝手にごくりと喉が鳴る。
何でもって言うのなら――

唾えてからも、
舌を動かしてみるんだ

こ、こぉ……？
チュポ、チュプ……
れろぉ……ジュポ……

そうそう、で、
たまに裏スジに舌を這わせたり
唇で挟み込んで吸うとか……

チュプ、れろチュピ、ちゅぷぅっ
そだ。オチンチンだけじゃなくて、
玉とかも気持ちイイんだよね
……んっ、ええろ♪

左右の玉にユーナの指が伸びる。
小さな手の中で睾丸がコロコロと転がされ、
これも結構気持ちが良い。

教科書で勉強したけど……
チュポ、んっ、れろーぉ♪
やっぱ、予習と本番は、
ぜーんぜん違うね……

ん？

ユーナの指が、いつの間にか
自分の股間にも伸びていた。
股の間で指が艶めかしく動いているのがわかる。
指が蜜を掻き出すいやらしい音が
かすかにクチュクチュと聞こえてきていた。

ん……ちゅぷぅ……っ、
なんか……はふ……
オマンコ疼いちゃって……

おチンポ舐めたらマンコも濡れるなんて……教科書には書いてなかったよぉぉ……
……ふぅん。じゃあ
俺は足首を曲げて、つま先でユーナの股間に触れてみた。
ひくぅぅぅ……っ!!し、師匠らめぇっ!よ、余計に……ぁふっ、我慢できなくなるぅ……
ふぅ、れちゅ、レルッ……感じるぅ……もぉ我慢できなくなっちゃうってばぁ♪
れろぉ、チュパッ……ジュポ……っ、ふぁぁ……おマンコどんどん切なくなる……
パンツ越しでもワレメが熱い。小さなそれがギューッと足先に押し付けられてくる。少しでも快感を得たいのか、ユーナは腰を揺すってマンズリを繰り返していた。
フェラの練習してるんだろ?俺がイクまでが課題だから――なっ!

し、師匠……ごめんなさぁい……
ボク、オマンコおかしくなっちゃいそぉだよぉ……
ししょぉ……
フェラ、上手く出来たら、
ボクのオマンコに、
オチンチンハメハメくれる……？
……仕方ねーなぁ。
はめてやるから、
気合入れてねぶれよ？
やたっ♪
ボク頑張るよっ、
あむぅ……♪
ん……チュボっ、
チュプ、れろぉ！
れるぅぅぅぅぅぅぅーっ♪
ッ！？　うっ……
急に張り切りやがって
突如、ユーナの舌の蠢き方が激しくなった。
喉に当たるほど、チンポが深くまで呑まれたのだ。
ら、らって嬉しいんだもんっ。
ちゅっぱ、チュプ、れるるっ、
れろぉぉん……！
えへへ、師匠がご褒美の
約束してくれたぁ……
んむぅっ、んちゅっ、
ちゅるぅぅぅぅ……っ

野良猫に変な情が湧かなきゃいいんだが……
俺の迷いなんてお構いなしに、
ユーナのフェラチオはどんどん加速する。

んぷぅ……んちゅぅっ、ちゅるっ、ちゅうぅぅっ！

（あー、くそ。もうどうにでもなれ。こいつの口でイキまくってやる！）

んぷぅッ！？ んんぅ……
んんぅぅっ！？ んぅぅぅ！

んむぅぅぅっ！
ぢゅぽっ、ぢゅぢゅっ……むぐっ、
むっ……むぐぅぅぅぅぅぅっ！！

んぷぅっ！
ん、んぷ、ぷはぁ♪
師匠のおチンポ……
口の中で暴れてるっ♪

イキたいんだよね？
いいよ師匠っ、
ボクのお口に精液……
いっぱい出して……っ

俺は自らも怒張を突き出した。
ユーナが顔を歪めながら必死に咥えている。
その苦しそうな表情に背筋が少しゾクゾクした。

ぜんぶ飲んであげるねっ、
ボクのお口をドロドロに
……んぅっ！

——びゅぷりゅウっ、びゅっぷぅぅ！
んぅっ！？
んぅぅぅっ、ンッ、んくぅぅぅっ！
ん……んぅっ、んく……
んくぅっ、ん……コクン♪
（う……
飲んでやがる……）
怒張の破裂を受け止め、小さな口腔が震える。
見る間に大量の牡汁で口内を満たされて
……ユーナは発情に顔を紅潮させていた。
うぶっ！！
ふぐぅ……ひっく、コホッッ
……あ……あぅぅぅ～～……
れろ、チュプ……ちろっ……ちゅぅぅ……
喉奥にペニスを突き入れたままでの射精だった。
喉の粘膜や食道や内臓に、直接精液を注いでやる。
まだ、出るッ

うん……んっ、んぅぅぅ……っ！
レロッ、ぢゅぱっ、はふっ、せーしっ……んっ！んじゅっじゅるぅぅぅぅーっ！
ま、まら出ひぇりゅぅ
望み通り飲みきれないほど精液を出してやる。
そう思い、ペニスを歯ブラシみたいにして口腔を責め立てる――

上目遣いに俺の様子を窺いながら、
懸命にチンポを舐め清めていった。

コクン～～っぷ、はぁッ
……うく……ふぇぇ……っ

精液を嚥下するたびに、
震えた口腔が亀頭を舐める。
それに促されるようにして、
俺の愚息は射精を繰り返した――

むぐ……ん、んぅぅ、ぷはっ♪
はぁっ、ふわぁ……
師匠お出しすぎだよぉ……♪

ちゃんとおマンコの分、
残しといてよぉ？

わーってるから、
とりあえず全部飲め

はぁい♪
んっ、んくっ、ん、
んちゅぅぅぅ……♪

ん……っ、ぷはぁ……！
師匠のせぇしって、最後まで熱ぅい♪
未熟とはいえさすがはサキュバス。
尿道に残った精液まで吸い出してくる。
唇からはみ出した白濁も、ユーナは
律儀に舌で舐め取って悦んでいた。
ぴちゃっ……あむっ、
んっ、美味ひぃ……♪
よ、よくそんなもん、
美味そうに飲むよな
ひどぉい。
飲めって言ったの師匠なのにぃ♪
……いかん。スケベ発言で
チンポがまた勃ちそうだ。

うにゃッ？
ししょーまたっ？
れりゅ、ぷはぁあっ♪
レロッ、ぢゅりゅ♪
ひゅご……ごきゅん！
あ、あ、まら出るっ♪
喜ばれて悪い気はしない。
が――なんかもっとこう初々しく、
うぇってなって吐き出しそうになるのを
必死にこらえて、一生懸命飲むようなのも
見てみたい気もしてくる。
てか俺の脳内理想少女だと、
その反応以外は見せないことになっている。
師匠のせーし、ずっと
濃くて、苦くて……
ボク大好き……にゃは
（はは……まぁ、
現実は厳しいってか）

なになに師匠っ？

気にすんな

ユーナが嬉々として精子を味わう様子に、
なんとなく苦笑を漏らしてしまうのだった。

じゃ、じゃっ、
今度はボクのオマンコに
ご馳走してくれるんだよねっ♪
ねっ♪

……ま、
約束は約束だしな……

溜息を一つ漏らし、俺はユーナを抱き上げてやる――
精液まみれの顔をシーツに擦られてはたまらないので、
立ったままハメてやることにした。